

2009年度「卒業時意識調査」報告

加藤 健二

はじめに

卒業予定者を対象として大学での4年間の勉学全体について振り返ってもらうアンケートは、これまで法学部や教養学部などで独自に行われてきたが、2009年度より「卒業時意識調査」の名称のもと全学で同一設問を使って実施されることとなった。その結果は、「2009年度 東北学院大学卒業生意識調査 全学共通設問 単純集計結果（学科ごと）」という冊子にまとめられて関係者に配布され、またそのローデータも、申し出によって入手可能になっている。しかし、単純集計の表からは結果の要点や各学科ごとの特徴などが読み取りにくい。そこで、改めて若干の統計的処理を加えながら、より要点の分かりやすい報告を示すこととした。

1 調査の概要

1.1 調査の目的

卒業生の意識を把握することによって、大学が「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」等として掲げている目標に沿った教育が実現しているか否かを点検し、今後のカリキュラム改善や教育内容・方法の見直しに資する情報を得ることが本調査の目的であった。調査票には、冒頭に以下のような文章が記載されていた。

『この調査は、現在の本学の教育内容・方法のあり方などを点検・評価し、これからの改善方法を考えるうえでの重要な参考資料とするために、すべての学部学科の卒業生を対象に行うものです。回答は統計的に処理され、個人が特定されることはありませんので、以下の各質問に思ったままを正直に答えてください。』

1.2 調査内容

上記目的に照らし、全学共通設問は基本的に大学の「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」の各項目について具体的に問うものが用意され、4つ、あるいは5つの選択肢からひとつを選択する形で回答された。その内容をグループ化すると以下の4領域となる。なお、各設問の内容は後の「回答結果」のところに記載されている。

- ・カリキュラム、授業に関する設問 12問
- ・4年間で身につけたと思う技能、態度に関する設問 6問
- ・教育関連施設の利用のしやすさに関する設問 4問

・ 総合評価 1問

なお全学共通設問の他に、各学科が独自に設問を設定することができた。但し、調査票のもつ制約により、選択肢数10からなる2つの設問か、選択肢数5からなる4つの設問が可能となっていた。また自由記述欄も置かれており、学科によってはこの欄へ回答を記述するよう求める設問を設定していた。

1.3 調査の実施

- (1) 調査主体：学部長会
- (2) 調査対象：2009年度卒業予定者全員
- (3) 調査票の配布・回収方法：アンケートは、教授会卒業判定会議後の成績表配付時（2010年2月23日）に、学科（グループ）ごとの成績配付教室で行われ、調査票への無記名回答の後、その場で回収された。調査票の配布・回収は、グループ主任の手によって行われた。
- (4) 回収数および回収率：学科ごとの回収数および回収率は以下の通りである。

表1 学部・学科別回収数および回収率

	回収数	卒業生数	回収率
英文(昼)	210		
英文(夜)	30	284	84.5%
キリスト教	6	6	100.0%
歴史	165	168	98.2%
経済(昼)	499		
経済(夜)	74	574	98.1%
経営(昼)	299		
経営(夜)	35	366	91.3%
法律	359	387	92.8%
機械知能	141	141	100.0%
電気情報	124	129	96.1%
電子	66	66	100.0%
環境建設	112	115	97.4%
人間科学	91	98	92.9%
言語文化	109	123	88.6%
情報科学	108	122	88.5%
地域構想	103	110	93.6%
全体	2531	2692	94.0%

- (5) 入力と処理：全学から回収された調査票（マークシート）をスキャナーで読み込み、業者作成の専用ソフトにより1～5の数値に変換されたデータがExcelファイルとして保存され

た。その後、全学共通設問については統計パッケージSPSSを用いて学科別の集計および統計処理を行った。

2 回答結果

ここでは、全学共通設問についてのみ取り上げる。また、単純集計の数値については先述の通り既に報告済みであるので、ここでは、各設問に対するポジティブな回答（そう思う+どちらかといえばそう思う、等）とネガティブな回答（どちらかといえばそう思わない+まったくそう思わない、等）にまとめて、その比率が学科ごとにどう異なるかということを中心に報告する。

2.1 性別

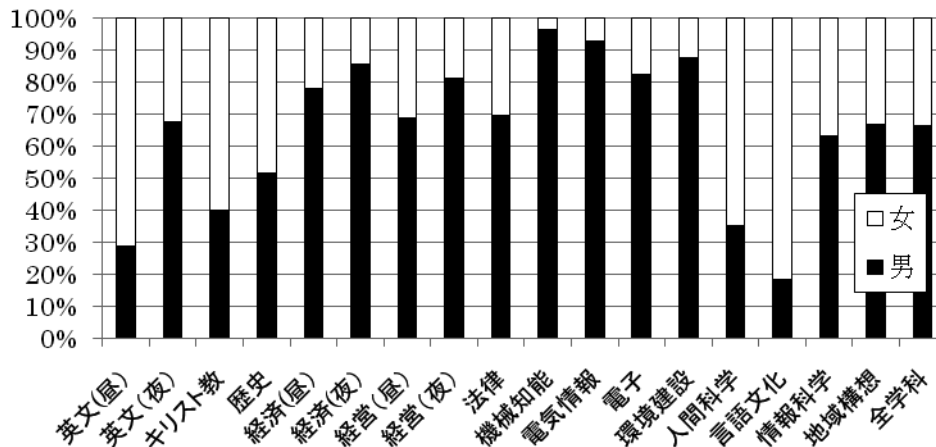


図1 各学科ごとの男女の比率

英文（昼）、歴史（キリスト教）、人間科学、言語文化において、全体での比率に比べて女性の比率が高く、工学部の4学科（特に機械知能、電気情報）や経済（昼）（夜）、経営（夜）で男性の比率が高い。

この結果自体はむしろ周知の事実であろうが、実は以下に報告する各設問に対するポジティブな回答とネガティブな回答の比率を男女別に比較してみると、ネガティブな回答をする率が男性のほうが有意に高かった（ χ^2 検定および残差分析にもとづく）。つまり、学科の男女構成比がネガティブな回答の比率に通奏低音的に影響を及ぼしているということである。この点を考慮しながら以下の結果を吟味していただきたい。

また、回答の比率に特徴があるとして学科名を挙げたのは、 χ^2 検定および残差分析において5%水準で有意であった学科であり、要するに全学科合計（全学）が示しめしている傾向と

有意に異なる学科を取りあげたことになる。有意には至らなかった特徴についてはグラフから読み取っていただきたい。

2.2 卒業までに要した年数

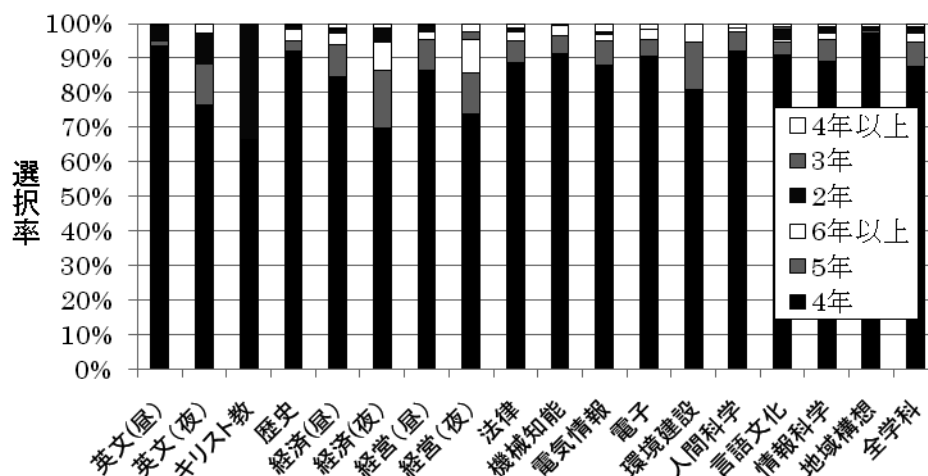


図2 卒業までに要した年数

規定年限（4年+編入の場合は2年）で卒業する場合と、それを超えて卒業する場合とに分けて合算してみると、規定年数を超えて卒業する、つまりは留年の割合が多いのは、経済（夜）、経営（夜）、環境建設、経済（昼）であった。

2.3 東北学院大学で受けた授業をふりかえてみたとき、次の①～⑫についてどう思いますか。

① 一年次に、大学で学ぶための基礎となる知識・技能を身につける授業を受け、役に立った。

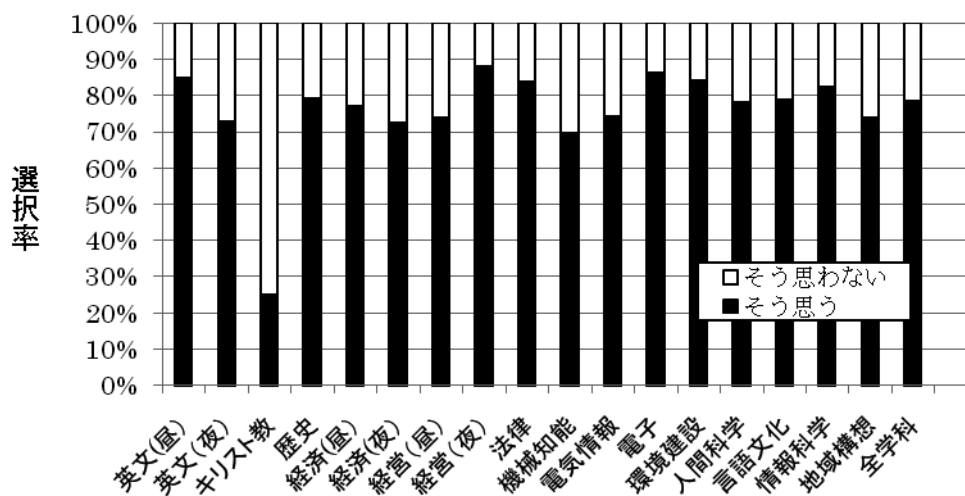


図3 初年時教育が役に立ったか

法律、英文（昼）で「そう思う」が多く、機械知能と経営（昼）で「そう思わない」が多い。

② 授業科目の学年配当は、前に習ったことをふまえて次の授業科目へ進むようになっていた。

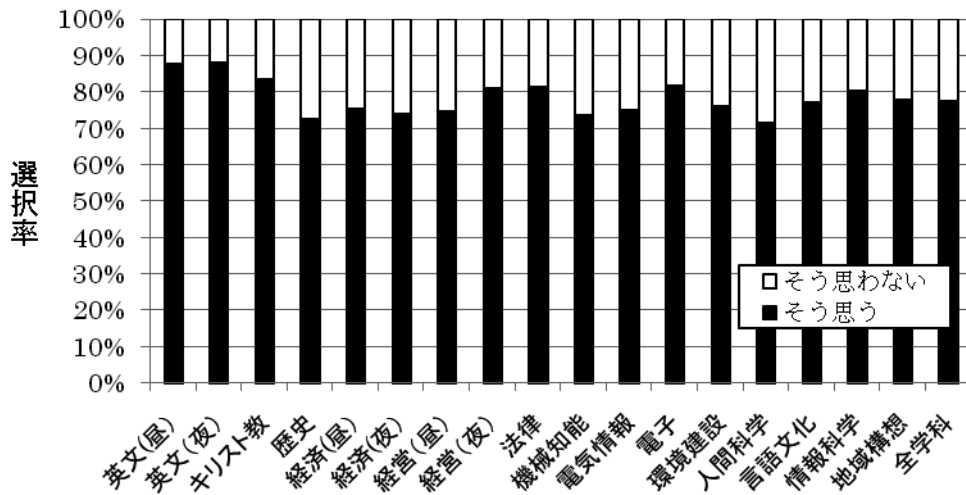


図4 カリキュラムの体系性

英文（昼）、法律で「そう思う」が多い。その他の学科は大差ない。

③ カリキュラムは、特定の領域だけでなく、幅広く学べるようになっていた。

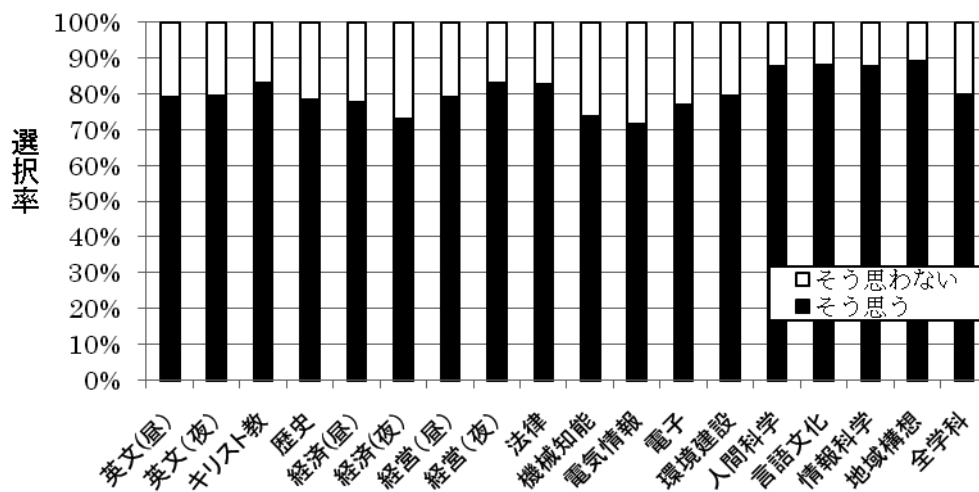


図5 学習の幅広さ

地域構想、言語文化、情報科学、人間科学、で「そう思う」が多く、電気情報、機械知能で「そう思わない」が多い。教養学部と工学部の違いが浮き出た恰好になった。

- ④ シラバスからは、各授業科目の目標、学習内容、成績評価方法などについての的確な情報を得ることができた。

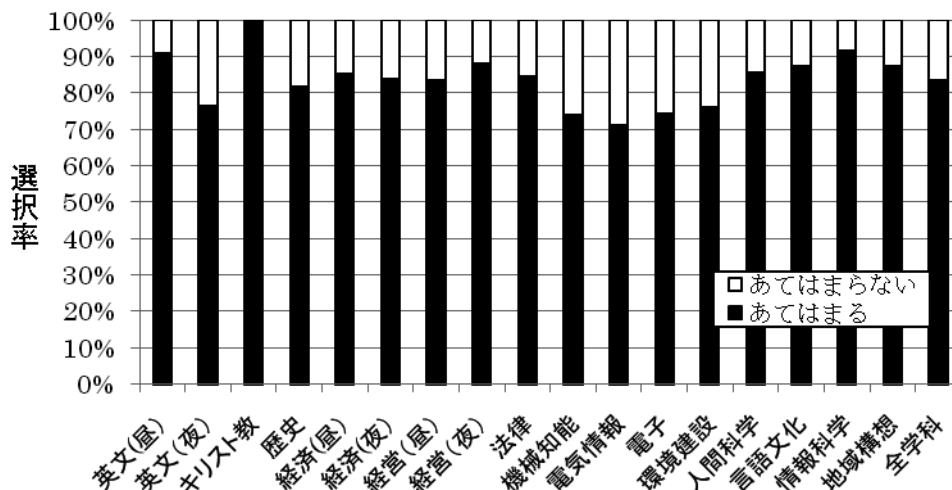


図6 シラバスの適切性

英文（昼）、情報科学で肯定的回答が多く、電気情報、機械知能、環境建設、電子、つまり工学部の各学科で否定的回答が多かった。

- ⑤ それぞれの授業科目が何をめざしたものなのか、目標が明確だった。

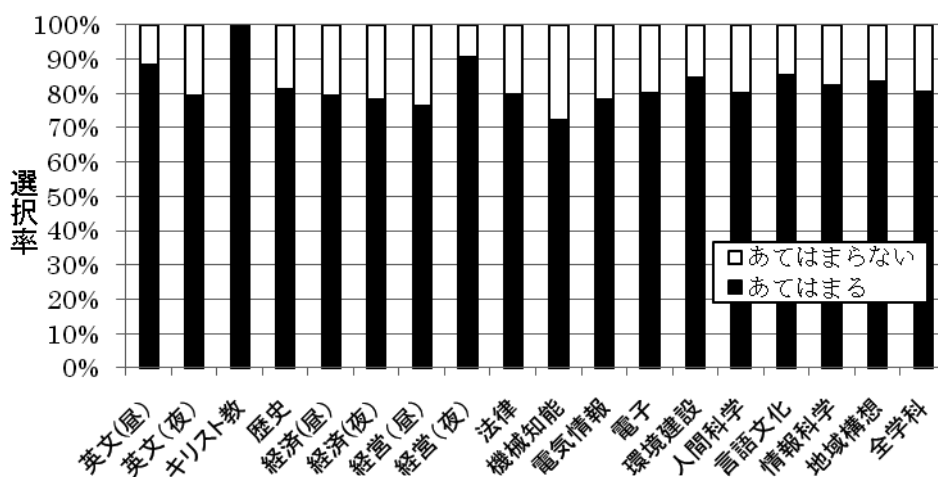


図7 授業目標の明確性

英文（昼）で肯定的回答が多く、機械知能、経営（昼）で否定的回答の割合が高い。

⑥ 授業では、学生の学習意欲を高める工夫がなされていた。

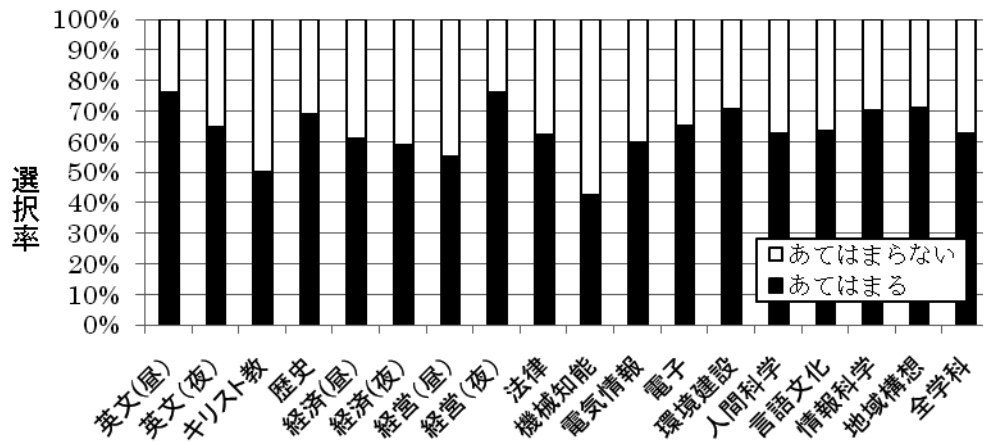


図8 学習意欲を高める工夫

肯定的回答の割合は全学科の平均が60%強と、あまり高くない。その中であって、英文(昼)、経営(夜)は相対的に肯定的回答が多く、機械知能、経営(昼)では否定的回答が多かった。

⑦ 単位認定や成績評価は、明確な基準・方法にもとづいて適切に行われていた。

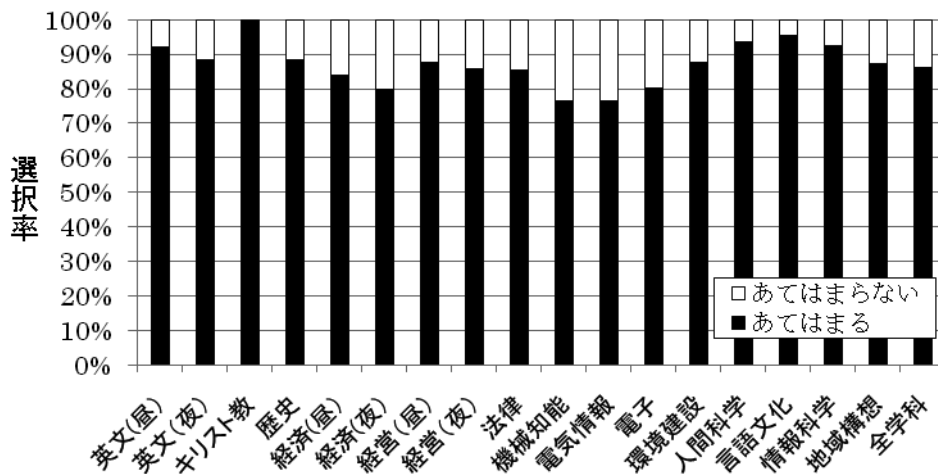


図9 成績評価の明確性

全体としては9割近くの回答が肯定的であった。その中であっても言語文化、英文(昼)、人間科学、情報科学で肯定的回答が多く、機械知能、電気情報で否定的回答が多かった。

⑧ 毎年4月に履修する科目を考えるさい、教員や職員から必要な説明・指導があった。

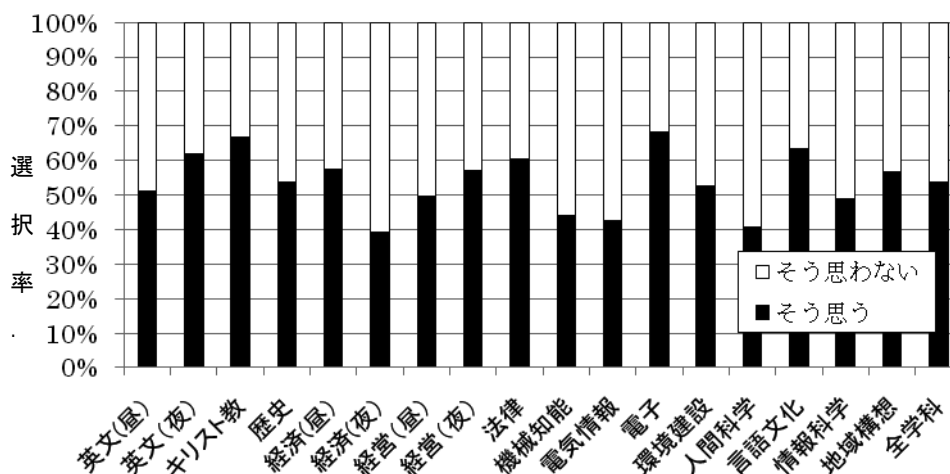


図10 履修登録時の指導

全体で見ると肯定的回答は5割を超える程度であり、低いといわざるを得ない。学科別では、法律、電子、言語文化、経済（昼）で肯定的回答が多い一方、人間科学、電気情報、経済（夜）、機械知能では否定的回答のほうが多い。

⑨ 授業以外でも、教員は、質問・相談に答えるなど学習上の支援をしてくれた。

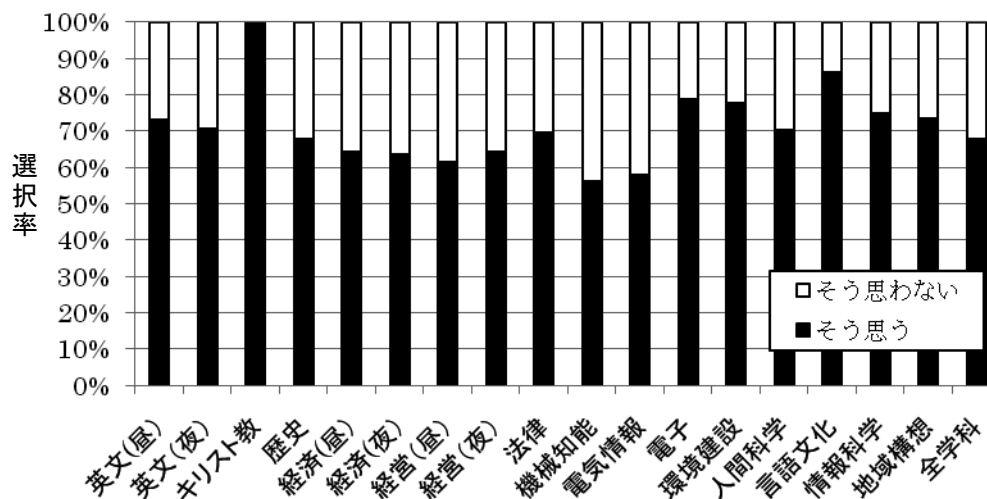


図11 授業以外での学習支援

言語文化、環境建設、電子で「そう思う」が多く、機械知能、経営（昼）、電気情報、経済（昼）で「そう思わない」が多い。同じ工学部でも学科によって評価が分かれている。言語文化、電子は設問⑧、⑨ともに他学科よりも評価が高い。

⑩ あなたにとって、授業のレベルは全体的にみてどうでしたか。

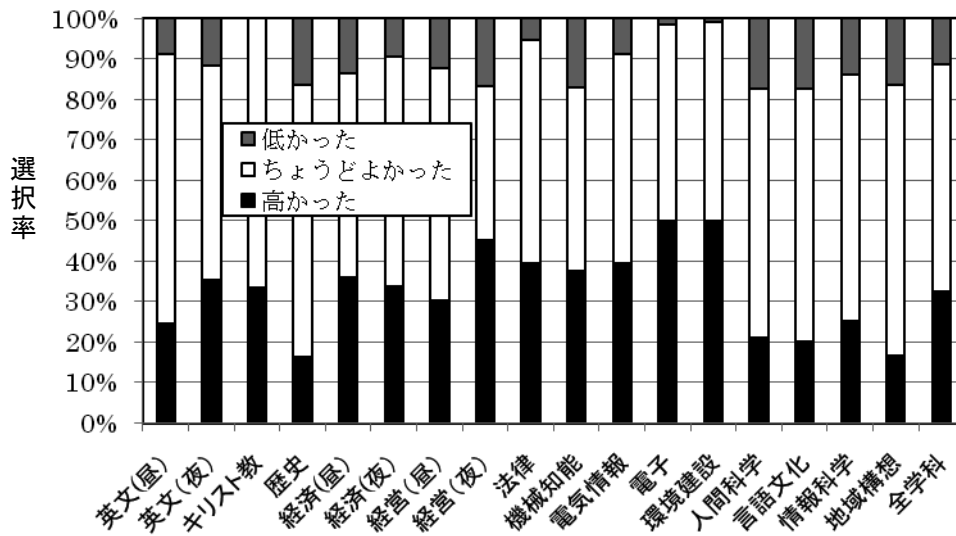


図12 授業のレベル

「高かった」が多かったのが環境建設、電子、法律、経済(昼)、経営(夜)、少なかったのが歴史、地域構想、言語文化、英文(昼)、人間科学であった。「ちょうどよかった」が多いのが、英文(昼)、歴史(キリスト教)、地域構想。「低かった」が多いのが、機械知能、言語文化、人間科学、少ないのが法律、環境建設であった。

⑪ 「キリスト教学」の授業にはどの程度興味をもてましたか。

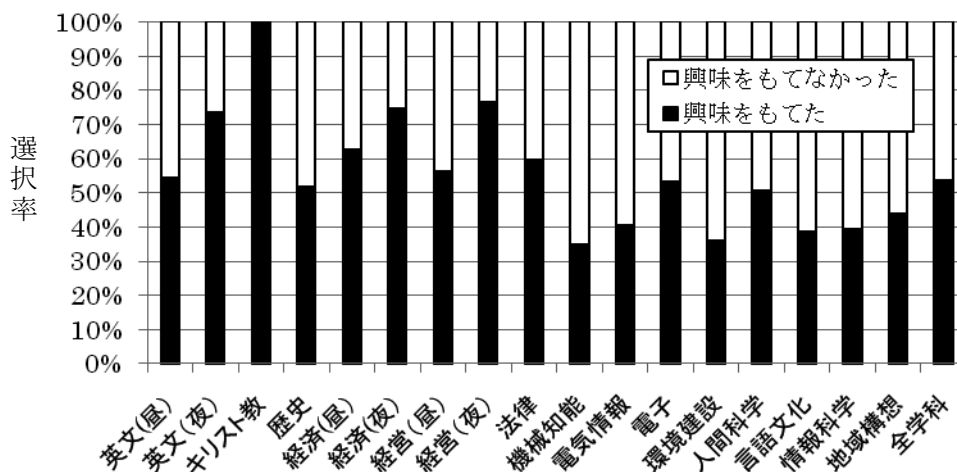


図13 「キリスト教学」への興味

「興味をもてた」と答えたのは全体の半数であった。経済（昼）、経済（夜）、経営（夜）、法律、英文（夜）で「もてた」が多く、機械知能、環境建設、言語文化、情報科学、電気情報、地域構想で「もてなかった」が多い。夜間主で評価が高い。

⑫ 「キリスト教学」の授業や大学礼拝を通じて、人格教育を受けたと感じますか。

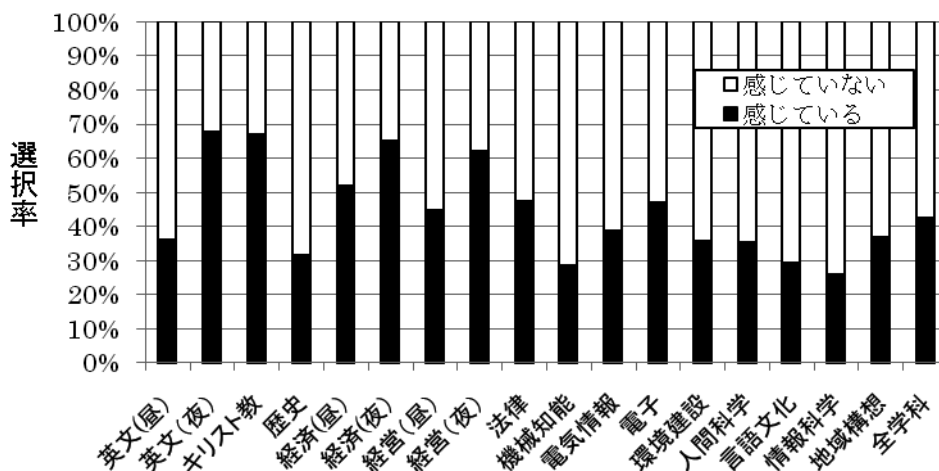


図14 人格教育を受けたと感じるか

感じているのは全体の4割強であった。しかし、「人格教育を受けたと感じるか」という問いに対する回答としてはどうだろうか。学科別では、経済（昼）、経済（夜）、英文（夜）、経営（夜）、法律で感じているが多く、情報科学、機械知能、言語文化、歴史（キリスト教）、英文（昼）で感じていないが多い。当然のことながら設問⑪と重なる部分が多い。

2.4 本学での勉学をふりかえてみたとき、次の①～⑥についてどう思いますか。

- ① 生涯にわたって学び続けるための基礎となる能力や技能（コミュニケーション能力、論理的思考力、情報リテラシーなど）を身につけることができた。

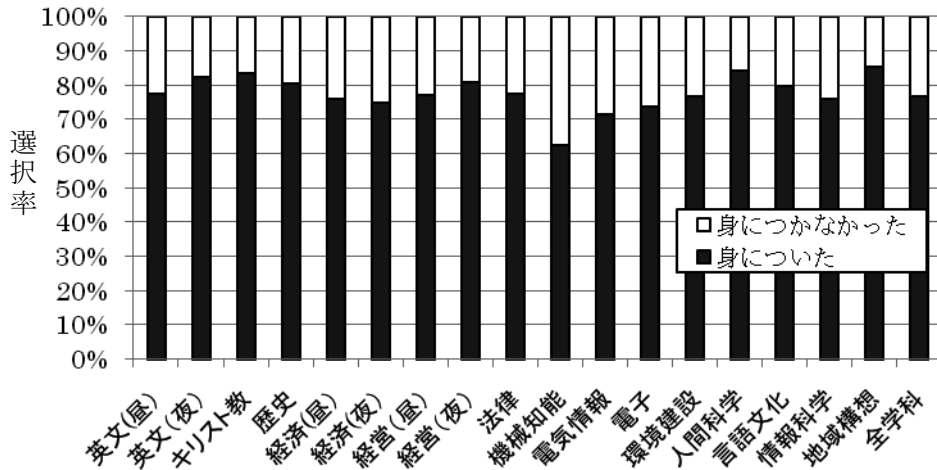


図15 学び続けるための基礎的技能

地域構想、人間科学で「身についた」と思っている学生が多い一方で、機械知能では「身につかなかった」と思う学生が多かった。

- ② 専攻した学問分野（学科）に関する基礎知識を身につけることができた。

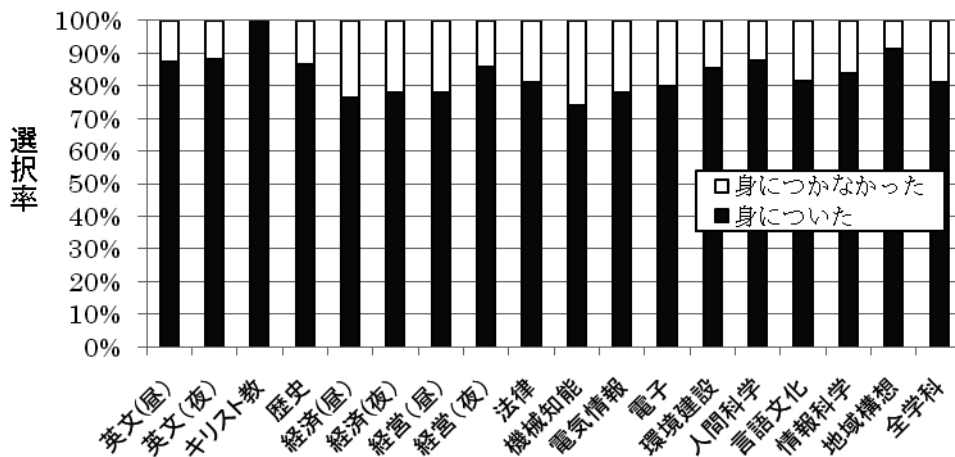


図16 専門的な知識

地域構想、英文（昼）、歴史（キリスト教）、人間科学、で「身についた」と思う学生が他と比べて多く、経済（昼）、機械知能で「身につかなかった」と思う学生が多かった。

③ 専攻した学問分野(学科)における基本的なものの見方・考え方を身につけることができた。

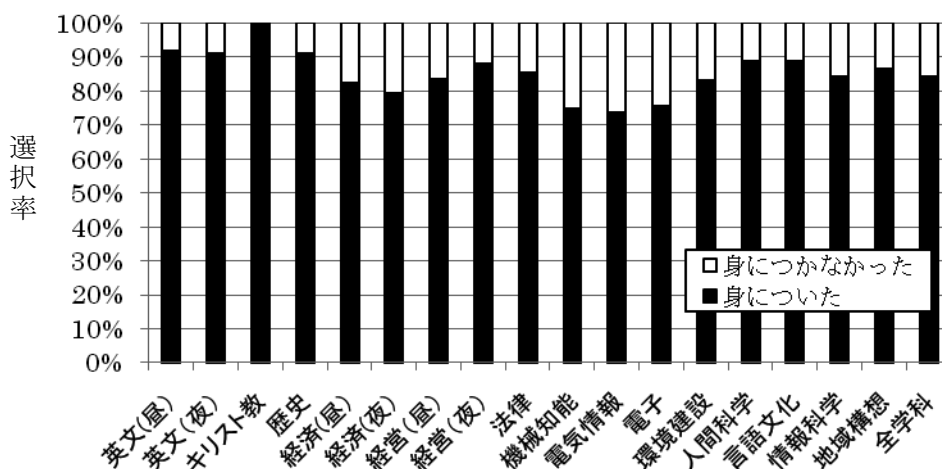


図17 専門的なものの見方

英文(昼)、歴史(キリスト教)で「身についた」が多く、電気情報、機械知能、電子で少ない。

④ ものごとを広く多様な視点から理解し、自分を相対化・客観化してとらえることができるようになった。

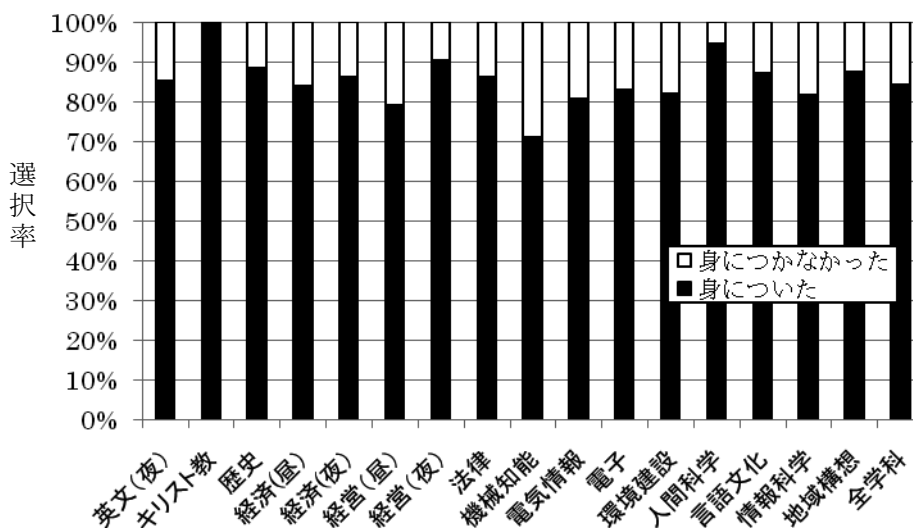


図18 多角的、相対的視点

人間科学で「身についた」が多く、機械知能、経営(昼)で少ない。

⑤ 自分で課題をみつけ、自分のもっている知識や技能を活用してそれを解決できるようになった。

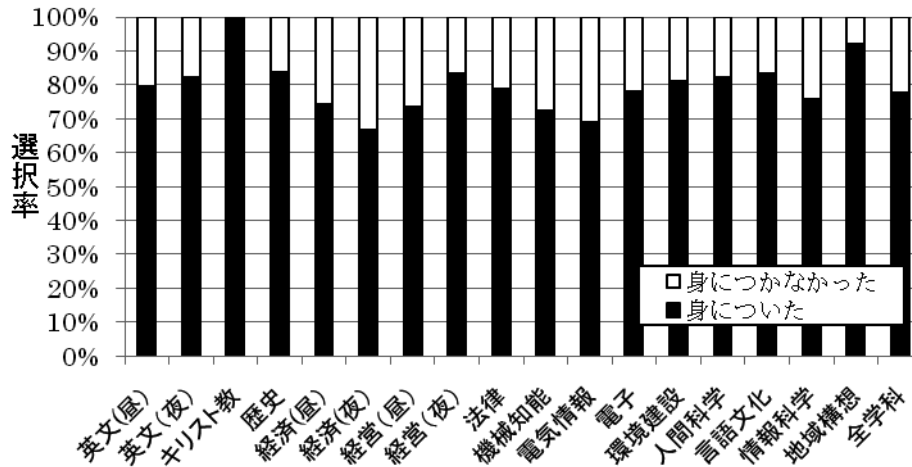


図19 主体的な問題解決

地域構想、歴史（キリスト教）で「身についた」が多く、電気情報、経済（夜）、経済（昼）で少ない。

⑥ 人生をよりよく生きようとするようになった。

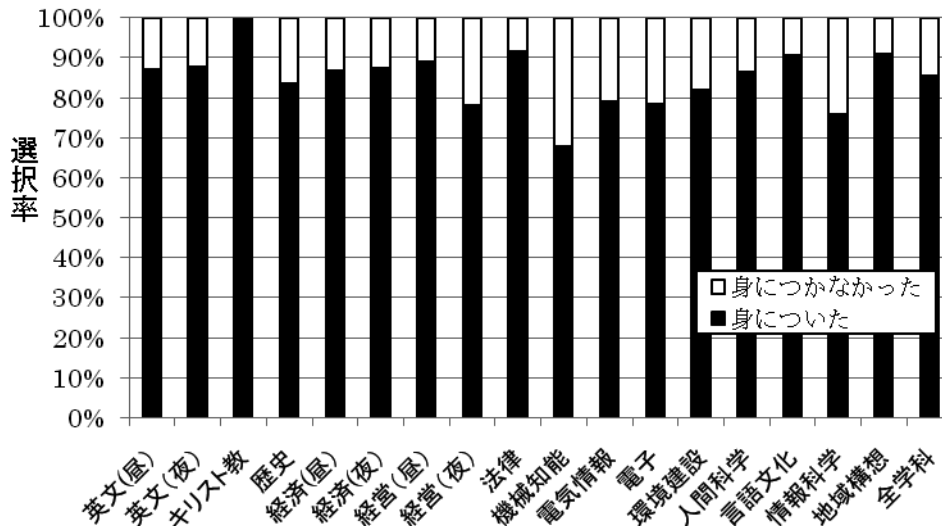


図20 よりよく生きようとする

全体の85%の学生が「身についた」と回答している。学科別に見ると、法律で「身についた」が多く、機械知能、情報科学、電気情報で少ない。

2.5 あなたは、次の①～④の教育関連施設の利用のしやすさについてどう感じていましたか。

① 図書館

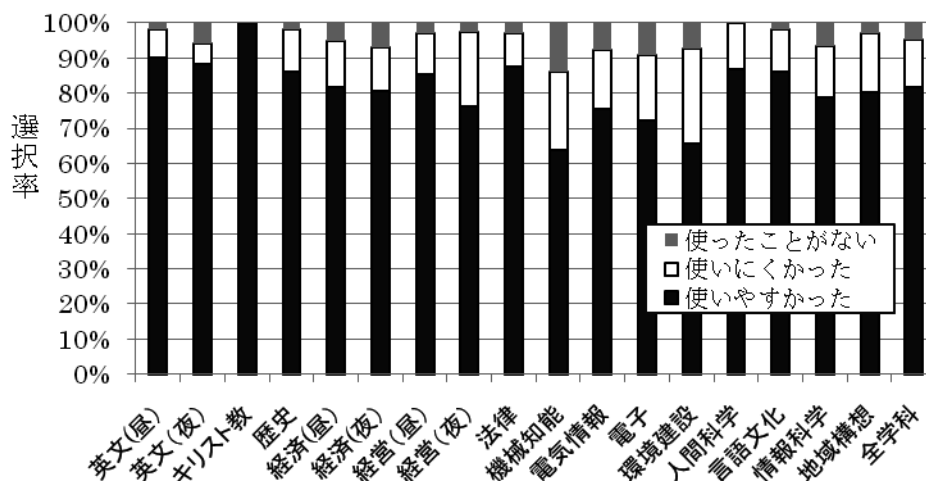


図21 図書館の利用のしやすさ

まず、人間科学、英文（昼）で「使ったことがない」が少なく、機械知能で多い。英文（昼）と法律で「使いやすかった」が多く、「使いにくかった」が少ない。機械知能、環境建設、電子で「使いやすかった」が少なく、機械知能、環境建設で「使いにくかった」が多い。基本的に、あまり利用していない学科ほど「使いにくかった」と答える傾向があるようだ。

② 情報処理センター

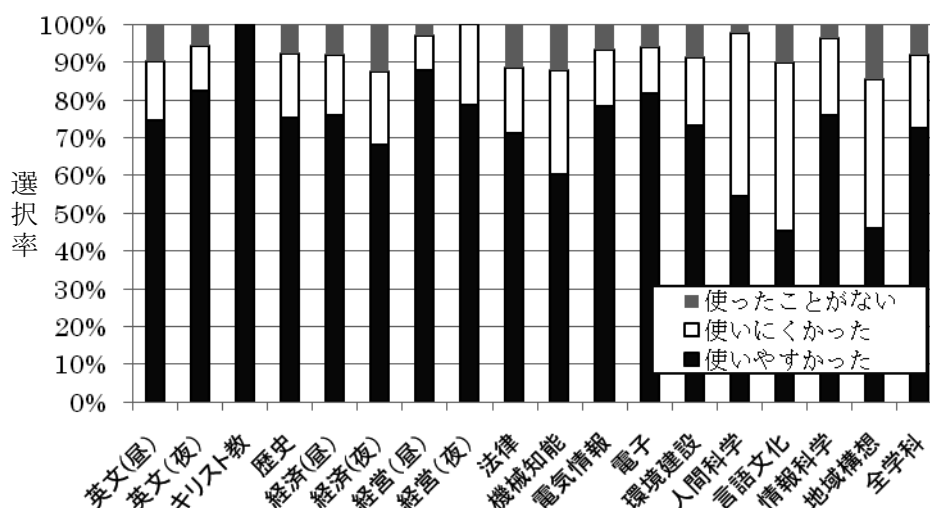


図22 情報処理センターの利用のしやすさ

まず、法律と地域構想で「使ったことがない」が多く、経営（昼）、人間科学、経営（夜）、情報科学で「使ったことがない」が少なかった。経営（昼）と経済（昼）で「使いやすかった」

が多く、「使いにくかった」が少ない。言語文化、地域構想、人間科学、機械知能で「使いやすかった」が少なく、「使いにくかった」が多い。よく利用することと高評価が一致している学科（主として土樋センター利用の学科と情報科学）と一致していない学科（泉センター利用の学科）が見られる。

③ オーディオ・ビジュアル（AV）センター

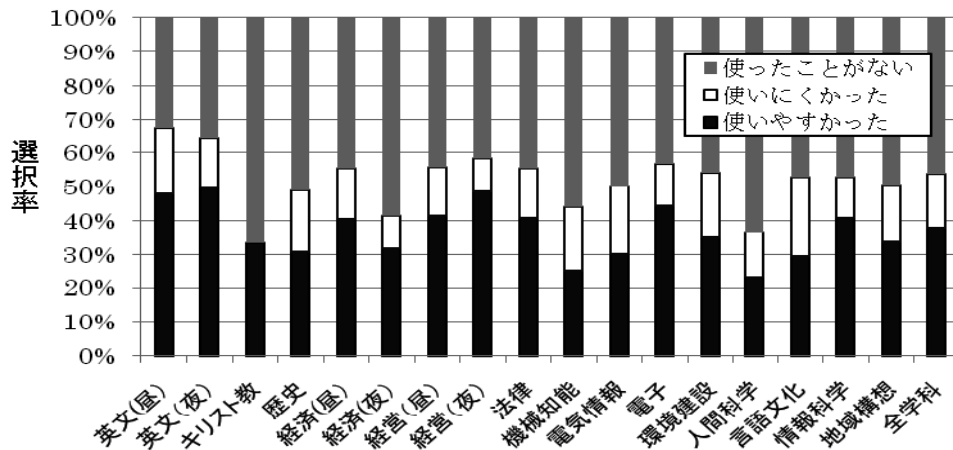


図23 AVセンターの使いやすさ

まず、全体の半数が「ほとんど使ったことがない」と回答している。学科別では、人間科学、機械知能、経済（夜）で「使ったことがない」が多く、英文（昼）で少ない。英文（昼）で「使いやすかった」が多く、機械知能、人間科学、歴史（キリスト教）、言語文化で少ない。言語文化で「使いにくかった」が多い。

④ 体育施設（体育館など）

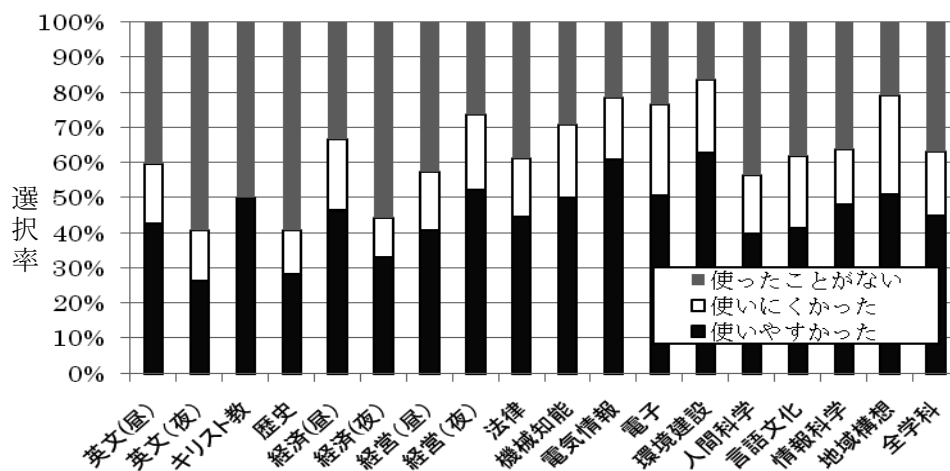


図24 体育施設の使いやすさ

学科により利用率が大きく異なり、歴史（キリスト教）、経済（夜）英文（夜）経営（昼）で「ほとんど使ったことがない」が多く、環境建設、電気情報、地域構想、電子、機械知能で少ない。環境建設、電気情報で「使いやすかった」が多く、歴史（キリスト教）、英文（夜）、経済（夜）で少なかった。地域構想で「使いにくかった」が多かった。

2.6 あなたは、総合的にみて、東北学院大学で学んだことをどのように評価していますか。

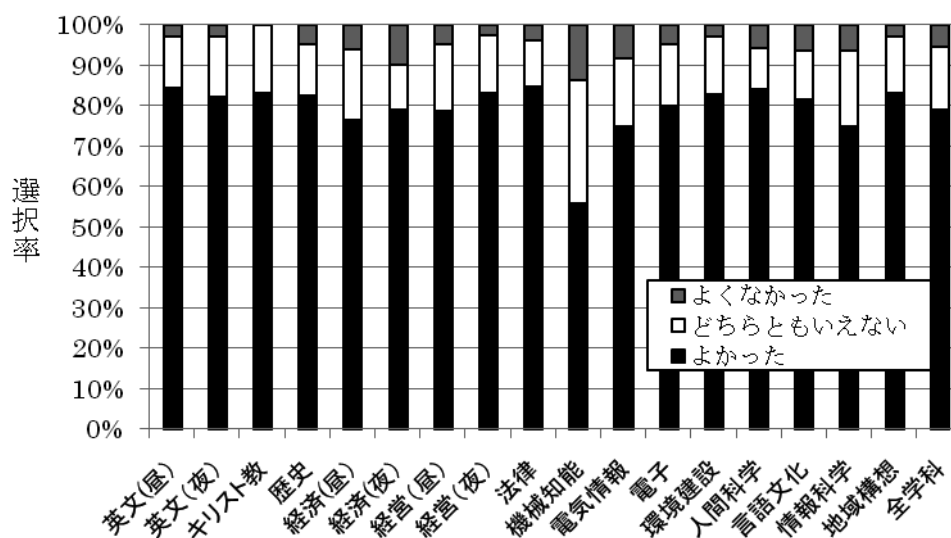


図25 総合評価

全体の8割の学生は東北学院大で学んだことを「よかった」と回答している。この8割という結果をどうとらえるか。学科別では、法律で「よかった」が多く、「どちらでもない」が少ない。英文で「よかった」が多い。機械知能で「よかった」が少なく、「どちらでもない」と「よくなかった」が多い。機械知能におけるこの厳しい結果については、当事者による丁寧な吟味が必要であろう。

3 まとめに代えて

設問によっては、大学にとって、学科にとって、あるいは科目にとって、かなり厳しい結果となったものもある。教職員側の事情や努力を理解してもらえない歯がゆさを感じた方もおられるだろう。しかし、われわれ教職員は、学生達が残してくれたこれらの結果を、彼らの愚痴、批判として感情的にとらえるのではなく、我が母校を改善するために協力したいという真摯で、建設的な意見表明として受け取るべきであろう。

多岐にわたる結果を総合して学科それぞれの実像を描くのは容易ではないが、特定の学科に

着目して各設問の結果を追っていくと、そこにはかなり明確な一貫した傾向、学科の姿が見えてくる。ここでは学科ごとのそうした特徴を明記することはしない。それらは当事者による丁寧な吟味・検討に俟つべきものと考えからである。

「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」がどの程度実現されているかについても貴重な情報もたらされている。これらの方針が全学教授会で承認されたのが2009年12月であり、回答した2009年度卒業生が1年次からこれらの方針に沿った教育・指導を受けてきたわけではない。従って当然のことながら、方針の中に謳われていることについて厳しい回答も見受けられた。例えば、科目登録時の履修指導の不足などがそうであろう。ただし、これらに対しては多くの学科で既に改善策が講じられつつあり、今後の回答の変化に期待したい。逆に、人生をよりよく生きようとする態度が身についたかという質問に「身についた」とする回答が全体の85%にも達している。われわれの教育実践のどの部分がそのような態度の涵養に効果をもっていたのか、あるいはその前に、「身についた」との回答が彼らの経験の何を反映したものなのかなど、吟味・分析すべき点は数多い。実証的データにもとづく不断の自己点検が、大学にとっても、学部・学科にとっても必要であると言えるだろう。

参考資料

齊藤誠,2010,「本学の教育課程改革に向けての試案」『東北学院大学教育研究所報告集』10:5-20.
東北学院大学教養学部授業評価・FD委員会,2009,『教養学部授業評価委員会報告書 2006・2007年度 第3部カリキュラム編』55-64.